

学校での異文化葛藤場面に対するALTの反応(2)

島根大学 築道 和明

1 はじめに

Adachi 他 (1998:5)はJapan Exchange and Teaching Program (以下JET Program) に関する研究が現状では極めて少ないと指摘し、次のように言う。

However, it is safe to say that there is a distinct lack of serious academic research on the JET Programme. There will always be a time lapse between the start of a teaching programme and the appearance of any studies on it, but in the case of the JET Programme this time lapse seems to have been unnaturally lengthened.

その理由として、Team Teachingの当事者としての日本人教師 (Japanese Teachers of English, 以下JTE) は忙しすぎて研究に時間や労力を割くゆとりがないこと、一方のAssistant Language Teachers (以下ALT) も、異文化に適応し、且つ教室での英語指導に慣れることで手一杯であること、さらに大学の研究者たちは、このプログラムを研究すること自体がそれほど価値あるものとはとらえていないこと、の3点を指摘している。JET Programに限らず、現実に進行中の教育施策を対象にした学問的な研究は、一般に多くの研究者の関心を惹かず、その一方で、教師は実践上の問題解決に忙殺される状況にあると言える。

2 JET Programに関する先行研究

Team Teachingに関わる問題を英語授業に直接関わる「指導法」とALTの日本文化への適応に関わる「生活面」という2分法でとらえるならば、「指導法」に関わる様々な問題は、JET Program導入以降、具体的な出版物という形で数多く提案され、解決策も提示されつつある。また、JET Programの実態や評価に関しても全国規模での調査がすでに行われている¹⁾。さらに、学習者のコミュニケーション能力の伸びという観点からみたプログラム自体の評価はさておき、Team Teachingの体験を積み重ねることによりJTEの多くは、プログラム開始直後の混乱や戸惑いから徐々に解放され、少なくとも授業実践に関しては、ある程度の理解も深め、自信もつけてきたのではないかと考えられる。

一方、「生活面」すなわち、ALTの異文化適応やJTEとALTとの異文化間コミュニケーションに関わっては、ALTの契約更改が3年までという期限付きであるという雇用形態により、3年毎に新たな外国青年が日本を訪れ、その都度、異文化適応に関わる問題に直面することになるという実態が存在する。ALTが任期途中で帰国する最も多い理由が指導法やTeam Teachingに関わる問題よりも、こうした生活面に関わる諸問題であるとする鈴木(1991)の指摘もある。

このようなTeam Teachingに関連する異文化適応についての先行研究としては、宇佐美(1990)²⁾、

(1990)^b、Nagata (1992)、Kobayashi(1994)などがある。いずれも自由記述形式を中心としたアンケート調査をその研究手法として採用している。以下に、宇佐美(1990)^b、Kobayashi(1994)から質問内容の一例を示す。

What type of cultural conflicts have you or your colleagues experienced in Japan?

Descriptions of specific incidents will be most helpful. (宇佐美, 1990^b: p.166)

1. Japanese people usually use indirect expressions, so you may sometimes have had difficulty figuring out what they are trying to say. Please give specific examples.

(Kobayashi, 1994: p.176)

こうした自由記述形式でのアンケート調査は、数多くの問題点を網羅的に把握できるという利点がある一方、そこから具体的な問題解決の道を探ることや一定の傾向などを把握することが難しいという欠点もある。従って、同じアンケート調査をするにしても、日本人が日本特有のルールに基づいてコミュニケーションを図った場合にどのようなルールが摩擦を生じやすいかを日米の大学生を対象にして調査した西田(1989)が行っているように、調査内容を対話形式で提示し、反応を求めるとともに、「コミュニケーションのプロセス」に焦点を当てた研究が必要であると思われる。

また、異文化適応に関わるプロセスをできるだけ多様な観点からダイナミックにとらえる研究も必要である。「文化」を個々の社会が内包している社会固有の意味体系であり、ある文化に育つことは「一定の動機・感情体系を身に付け、自分自身の意味空間を構築する(p.58)」ことであるととらえる箕浦(1990:62)は、異文化体験を次のように3つの視座からとらえている。

自分の文化のなかでは、行為にともなって生起する情動 (affect) が行為そのものと不可分に結びついているため、行為や感情の背後にある文化特有の意味の世界は、意識されることがない。認知、行動、情動の三側面の呼吸が見事に合っているため、一つの行動に三つの側面が含まれていることにすら気づかない。しかし、自文化の意味空間とは異なる異文化での暮らしでは、この三側面がバラバラになる事態を体験する。(引用者注——原文は縦書き)

ALTの日本文化への適応に関わる問題分析においても、「認知」「行動」「情動」の3つの側面からアプローチすることも必要である。例えば、文化摩擦が生じた原因について、頭の中では理解しているものの(認知面での理解)、それが言語行動・非言語行動に直接具現化されるとは限らない場合も考えられるだろうし、また、認知的な理解に基づいて目標文化の規範に従って行動しつつも、心の中では反発しているという場合もありうるだろう。この点でALTによる日本の文化への適応、及びJTEとALTとのコミュニケーションにおいて、そのプロセスをできるだけ重層的に把握するための方法論が模索されなければならないと言えよう。そのためには、アンケート調査での実態把握に加えて、面接による聞き取り調査なども併せて行う必要がある。

以上のような問題点を部分的に解決するために、筆者はALTの異文化適応に関わる調査を実施してきた。これまでの詳しい調査結果は、Tsuido(1997)、ならびに築道(1997)において報告した。ここでは、先にみた先行研究で問われている日本での生活全般に対する異文化適応という観点ではなく、「学校」という限定された場面における異文化適応に焦点を当てて考察した。何故なら、宇佐美(1990)^aに指摘されているように、ALTが指摘している問題の多くが学校という職場において生じているという現実が存在するからである。筆者のこれまでの調査結果については、後の議論の中で部

分的に言及するが、(1) 島根県内在住の30名のALTからの回答を分析したものであるので、さらに追調査を実施し、これまでの調査結果の信頼性を確認する、(2) Team Teachingのもう一方の当事者であるJTEを対象にした調査を併せて実施する、という2点が今後の課題として残されていた。

3 本研究の目的

- (1) ALTが学校で遭遇すると思われる10の異文化葛藤場面を想定し、それぞれの場面におけるALTのフラストレーションの程度を把握する。葛藤場面によるフラストレーションの程度に違いがあるか否か、あるとすれば、その考えられる要因は何かを考察する。
- (2) 10の異文化葛藤場面におけるALTのフラストレーションの程度をJTEに予測させ、上記(1)の分析結果との比較を行うことにより、JTEとALTとの葛藤場面に対するとらえ方に違いがあるか否かを探る。

4 調査方法

4.1 学校での異文化葛藤場面の選定基準

ALTが日本の学校においてコミュニケーションを図る主たる相手としては、(1)JTE及びその他の日本人教師、(2)管理職および上司(教育事務所の指導主事など)、(3)生徒、の3者であると想定してよい。これら3者とのコミュニケーションの場面を全て網羅するように配慮した上で、これまでの先行研究で指摘されている異文化適応に関わる問題やALT自身が記述している文献、さらには元ALTへの聞き取り調査などを通して、ALTが学校やそれに関連する異文化間コミュニケーション場面において直面すると思われる以下のような10の葛藤場面を設定した。それぞれの場面でのコミュニケーションの主たる当事者としては、場面1、2が「生徒」、場面3、9は「日本人教師」(職場の同僚)、場面4、6、8は「管理職及び上司」、場面7、10は「JTE」、場面5は「学校外の日本人」、ということになる。なお、アンケート調査の詳細に関しては、Appendix (1)を参照されたい。

Situation 1: Classroom behavior typical of Japanese learners: “consensus checking”

Situation 2: Disciplinary problems in the classroom and JTEs’ reactions: their “non-chalant” attitude towards disruptive students

Situation 3: Personal questions bombarded towards ALTs at *enkais*

Situation 4: Principal who reprimands ALT in a roundabout way

Situation 5: Japanese people’s views on teachers’ morals

Situation 6: Principal asking ALT whereabouts on vacation

Situation 7: JTE translates ALT’s self-introduction

Situation 8: Asked to work as a judge at a speech competition on Sunday

Situation 9: ALTs being isolated in one particular school out of several schools

Situation 10: “Embarrassing silence” at a formal meeting

4.2 調査手順

第1回目の調査は、1994年10月に実施した。ALTの住所、名前などの個人情報に関しては、プライバシー保護の理由から教育委員会などの公的な機関からの情報提供が難しい状況にあったが、カナダ人女性の元ALTに調査協力を依頼し、ALTの自宅住所についての情報を得た。

第2回目の調査は、1998年11月に実施した。これは、第1回目の調査から4年の期間を空けることにより、アンケート調査の回答者が第1回目の調査対象者と重複しないように配慮したためである。第2回目の調査では、島根県教職員録（平成十年度版）に記載されている情報に基づいて、勤務先の学校、あるいは教育事務所宛に調査用紙を郵送した。なお、調査対象者は第1回目が47名、第2回目は49名である。第1回目調査では、47名中30名から、第2回目調査では49名中24名から回答が寄せられた。

次に、JTEとALTとの間で10の場面に対する受け止め方に差があるか否かを明らかにするため（調査目的2）、10の葛藤場面を日本語に翻訳したアンケート調査を島根県内のJTEを対象に1999年1月に実施した。具体的には、島根県教職員録に記載されている教員名簿から、中学校教員70名、高等学校教員50名、合計120名を調査対象者としてランダムに選び、それぞれの勤務校宛にアンケート調査用紙を郵送した。その結果、中学校教員42名、高等学校教員35名、合計77名のJTEから回答があった。このアンケート調査では、（1）ALTの立場に立って、ALTがそれぞれの葛藤場面での程度のフラストレーションを感じているかを5段階で評定すること、（2）Team Teaching全般に関しての問題点や解決策を自由記述すること、の2点を求めた。この調査の詳しい内容についてはAppendix (2)を参照されたい。

4. 3 調査結果

調査時期に分けてALT対象の調査結果をTable 1に、また、2度にわたるALT対象の調査を合わせた結果とJTE対象の調査結果をTable 2に示す。

Situations	第1回調査(N=30)		第2回調査(N=24)	
	Mean	S.D.	Mean	S.D.
1 consensus checking	1.97	0.89	1.88	0.95
2 disruptive behavior	3.73	1.26	3.25	1.19
3 questions at <i>enkais</i>	1.60	1.00	1.21	0.41
4 indirect reprimanding	3.73	1.05	3.33	0.92
5 teachers' moral	2.73	1.39	2.88	1.26
6 whereabouts on a trip	1.83	1.12	1.33	0.56
7 JTEs' translation	2.90	1.30	2.50	1.38
8 working on Sunday	2.43	1.19	2.29	1.08
9 isolated at one school	3.43	1.28	2.79	1.18
10 no response from JTEs	2.83	1.29	2.63	1.06

Table 1. ALTs' Frustration-Grading Scales: first survey vs. second survey

Situations	JTEs (N=77)		ALTs (N=54)		Z score
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
1 consensus checking	3.14	1.08	1.93	0.91	6.97***
2 disruptive behavior	4.32	0.91	3.52	1.24	4.62***
3 questions at <i>enkais</i>	3.03	1.31	1.43	0.81	8.62***
4 indirect reprimanding	4.31	0.98	3.56	1.00	4.29***
5 teachers' moral	2.81	1.19	2.80	1.32	NS
6 whereabouts on a trip	2.74	1.25	1.61	0.94	5.91***
7 JTEs' translation	2.71	1.20	2.72	1.34	NS
8 working on Sunday	3.44	1.12	2.37	1.14	5.35***
9 isolated at one school	4.40	0.88	3.15	1.27	6.30***
10 no response from JTEs	3.96	0.98	2.74	1.18	6.23***

Table 2. A Comparison of JTEs' and ALTs' Frustration-Grading Scales

(*** p<0.001 NS: No significant)

(1) Table 1から明らかなようにALT対象の調査は、第1回目、第2回目ともほぼ同じ結果となった。すなわち、異文化葛藤場面とは言うものの、具体的な状況によってALTのフラストレーションは変化している。より具体的に言えば、調査に用いた10の異文化葛藤場面は、全般的な傾向として、フラストレーションの程度の高い場面（場面2、場面4、場面9）²⁾、フラストレーションの程度の低い場面（場面1、場面3、場面6）、両者の中間に位置する場面（場面5、場面7、場面8、場面10）、の3つのグループに大別することができる。

(2) Table 2に示したように、フラストレーションの程度の高い3つの場面については、JTEも同じような判断を下している。また、全体的にJTEのほうが、それぞれの葛藤場面におけるALTのフラストレーションの値を高く評価する傾向がみられる。中でも、ALTがそれほどフラストレーションを感じていないと思われる場面1、場面3に対して、JTEは高い数値をあげており、これらの2場面に関しては、両者の間で問題の認識上、ギャップが存在すると考えられる。

5 まとめと考察

まず、ALTの反応の中で全体的にフラストレーションの値が高かった3つの場面について、その調査結果を考察する。場面2（授業中の生徒の問題行動とJTEの態度）、場面4（校長の間接的な懲戒）、場面9（学校での孤立感）の3つの場面に共通している点として、コミュニケーションの経路が断絶されているということを指摘することができよう。ALTの多くは、言語、非言語によるコミュニケーションを重視する文化的な枠組みで生育してきたが、そのような文化的な背景を有する人間にとって、日本人の側のコミュニケーションを否定したり、回避する態度や行動はストレスを生む原因となっていると思われる。中でも、場面2と場面4に関しては、コミュニケーションに関わる相手が複数存在しており（場面2では、生徒とJTE、場面4では、校長と近所の住人）、その点では同じ異文化葛藤場面とは言うものの、こうした対話相手に関わる要因が二重、三重にALTのフラストレーションの度合いを高める結果につながったとも考えられる。例えば、場面2であれば、問題行動を起こす生徒本人よりも、その場では何ら指導を加えないJTEの態度や、場面4であれば、校長の間接的な表現に加えて、交通信号無視という（ささいな？）事柄を本人に直接注意するのではなく、校長に連絡するという日本人住民の態度などがフラストレーションを増長させる原因になっているのではないと思われる。アンケート調査では、それぞれの状況での対処方法の記述なども求めているので、今後、これらの分析結果とも併せて、この点を検証していきたい。

これら3つの場面と対照的な状況として、場面1（指名した生徒が周囲の生徒と相談する）、場面3（宴会で質問攻め）、場面6（休暇中の居所について情報提供）を位置付けることができる。もちろん、これらの場面はALTの自文化のコミュニケーションルールや価値観とは異なっている。しかし、少なくともコミュニケーションの経路は維持されているという点で前述の3つの場面とは対照的な状況にあると考えられる。この点で、ALTのフラストレーションの値も低かったのではないと思われる。特に、場面6については、質問自体はプライバシーに関わる内容であるが、その際に質問の意図をALTに説明しているということがALTの反応に影響を及ぼしたのではないかと推測される。

次に、JTEに対する調査結果とALT（第1回調査と第2回調査を合計したもの）とを比較するとJTE、ALTの双方が同じような反応を示していることがわかる。先に見たフラストレーションの数値の高い3つの場面（場面2、4、9）に対しては、JTEも同様に高い数値をあげている。ただ、これらの場面も含めて全般的な傾向として、JTEはALTよりもそれぞれの問題状況をより重大なものとしてとらえる傾向がある³⁾。中でもALTの側ではそれほどフラストレーションを感じていない場面1、場面3に対して、JTEはフラストレーションの度合いを高く評定しており、両者の間に、

これらの問題認識の点でギャップが存在していると考えられる⁴⁾。これが何によって生じているかについては、今回の調査からは断定的な結論を導くことはできない。JTEには、相手の行動を察するという傾向があると言えるのか、あるいは、JTEがこれまでに目にしてきた欧米との比較に基づいた日本人論、日本文化論などの記述が影響しているのか、今後の課題としたい。

註

- 1) Team Teachingの指導に関しては、多くの出版物が刊行されている。また、JET Programの全国的な調査に関しては、例えば、JETプログラム研究会(1996)の調査などがある。
- 2) 場面9に関連しては、第1回目の調査よりも2回目の調査の方が数値は下がっている。この原因としては、ALTの招致人数の増加に伴って、いわゆる“one-shot visit”タイプの勤務形態が減りつつあり、それに代わって特定の学校を定期的に訪問しているALTの数が増えつつあるという勤務形態の変化が考えられる。
- 3) この点は、日米の大学生を対象に、日本のコミュニケーション・ルールに基づいた対話に対する反応を調べた西田(1989)の調査結果と符号している。
- 4) 例えば、宴会について以下のような対立する記述が見られる。

宴会を楽しむ者も多いが、宴会を嫌い宴会にまつわる経験によって日本社会や日本人を否定的に見ようになる者もいる。いずれにしても、宴会はAETにとっては最大の関心事である。(和田1991: p.42)

Thank God! People are actually talking to me! Who cares what they ask me!

I see this as an opportunity to get to know some teachers in a more personal way. I do not think these questions are too personal. (アンケート調査の記述から)

Bibliography

- Adachi, K. et al. (1998) *Perceptions of the JET Programme*. Hiroshima: Keisuisha
- Anderson, F.E. (1993) "The Enigma of the College Classroom: Nails that Don't Stick up," in Wadden, P. (ed.) *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities*. Oxford Univ. Press. (pp.101-10)
- Feiler, B.S. (1991) *Learning to Bow: An American Teacher in a Japanese School*. N.Y.: Ticknor & Fields.
- Kobayashi, J. (1994) "Overcoming Obstacles to Intercultural Communication: AETs and JTEs," in Wada, M. & A. Cominos (eds.) (pp.162-177)
- Ministry of Education, Science and Culture (1994) *Handbook for Team-Teaching*. Tokyo: Gyosei Corporation.
- Nagata, Y. (1992) Workshop V Supplementary Data, presented at the 1991~1992 Chugoku-Shikoku Block AET Mid-Year Block Seminar at Kochi City on Jan. 23rd, 1992.
- Tsuido, K. (1987) "Theoretical Considerations on Teaching Culture in TEFL in Japan," in *Studies in English Language Education: A Collection of Essays Published in Commemoration of Professor Naomi Kakita's Retirement from Office.*, pp.114-124. Tokyo: Taishukan.
- (1994) "Misunderstanding—The First Step to Mutual Understanding," in *English Teaching and English Studies.*, No. 11, pp.11-20. Department of English, Faculty of Education, Shimane Univ.
- (1997) "An Analysis of Assistant Language Teachers' Perception of School-Related Cultural Problems," *ARELE*, Vol. 8, pp.61-70, The Federation of English Language Education Societies in Japan.

Wada, M. & A. Cominos (eds.) (1994) *Studies in Team Teaching*. Tokyo: Kenkyusha
 Wadden, P. & S. McGovern (1991) "The quandary of negative class participation: coming to terms
 with misbehavior in the language classroom," *ELTJ*, 45, 2, pp.119-127.

宇佐美昇三 (1990)^a 「「外人」と指ささないで AET文化摩擦調査より」『英語教育』第39巻, 7号
 p.77-80

----- (1990)^b 「第II章 AETから見た日本人の国際的資質 第1節 AET (外国人英語指導助
 手)の調査を通して」中西晃代表「日本の児童・生徒の国際的資質・能力育成に関する基礎的研
 究」pp.160-170 平成元年度科学研究費報告書所収論文

大形久男 (1988) 「AETはTeam Teachingをどうみているか」『英語教育』第38巻, 10号, pp.40-
 46.

木村肇介 (1991) 「AETの本音とJTEの役割」『現代英語教育』第28巻, 8号, pp.18-20.

語学教育研究所 (1988) 「中学校・高等学校英語科教育における外国人教師の役割に関する実態調査
 と授業方法の開発」『語学教育研究所紀要』第2号, pp.3-108.

JET プログラム研究会 (1996) 「中・高等学校におけるJET プログラムの現状と課題」国立教育研究所

鈴木幸平 (1991) 「AET受入れとJTEのコクサイ化-生活場面でのトラブル解消のために-」『現代英語
 教育』第28巻, 第4号, pp.13-14.

築道和明 (1987) 「異文化間コミュニケーションに関する基礎的考察-Misunderstandingの問題を
 中心にして-」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 16, pp.25-33

----- (1997) 「学校での異文化葛藤場面に対するALTの反応-島根県在住のALTに対するアンケート
 調査に基づいて-」『高英研』No.36, pp.3-17, 島根県高等学校英語教育研究会

直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき』大修館書店

西田ひろ子 (1989) 『実例で見る日米コミュニケーション・ギャップ』大修館書店

野沢聡子 (1989) 「ドキュメント・外国人講師」『英語教育』第37巻, 13号, pp.8-12.

堀田佳男 (1997) 『どうしてYesも言えないの アメリカ人が見た日本の学校現場』労働旬報社

松村幹男他 (1988) 「英語教育学モノグラフ8 学校英語教育における外国人講師の役割」『英語教
 育』9月増刊号, 第37巻, 7号, pp.68-81.

萬戸克憲 (1987) 「外国人講師導入と文化摩擦」『英語教育』第36巻, 4号, pp.16-17

----- (1992) 『国際化と英語科教育』大修館書店

箕浦康子 (1990) 『文化のなかの子ども』東京大学出版会

森永 誠 (1989) 「外国人講師の声 -実態調査から-」『英語教育』第37巻, 13号, pp.28-31.

渡邊寛治 (1996) 「JET Program(me)の現状と課題」『現代英語教育』第33巻, 6号, pp.9-11.

和田 稔 (1987) 「外国人講師導入の現状と将来」『英語教育』第36巻, 4号, pp.8-12.

----- (1988) 『国際化時代における英語教育-Mombusho English Fellowsの足跡』山口書店

----- (1991) 『国際交流の狭間で 英語教育と異文化理解』研究社出版

----- (1995) 「第10章 コミュニケーションと国際理解 高梨庸雄他『英語コミュニケーション
 の指導』研究社出版, pp.170-185

Appendix (1) : Questionnaire administered to ALTs

1 Background Information

- (1) Age: (2) Nationality: (3) Male/Female:
(4) When did you come to Japan?
(5) Schools you are working in now;
(a) junior high school (b) senior high school (c) others (please specify)
(6) Number of the students and number of JTEs at your school(s)
No. of the students (approximately):
No. of the JTEs:
(7) Situation of team-teaching:
(a) base-school (b) one-shot (c) others
(8) Have you had some experience as a teacher (of any subject) before you started teaching in Japan (either full-time or part-time)? When you have had some, would you please give me some detailed account of your experience?
(9) What was your major(and minor) at university?
(10) Have you ever studied foreign languages other than Japanese language? If yes, what specific language and how long have you studied?
(11) Have you ever studied Japanese language? If yes, when and where? (This includes the study of Japanese since you arrived in Japan.)

2 Some situations you are familiar with

The following are some hypothetical situations you might have been (or might be) involved in at school. Suppose you are in each situation. (1) Please write down how you might react. (2) Then write down the most appropriate adjective that describes your feelings. (3) And finally circle the number that expresses your feelings most appropriately (number 1 means "not so frustrated," while number 5 "very frustrated.")

(1) Situation One:

You want to get your students to respond verbally, so you ask the class a specific question. However, no one volunteers to respond. You wait for some seconds but with no effect, so you nominate one student. The student points to him/herself and starts to talk with the classmates sitting around. (場面2以降、以下の回答欄は省略)

How would you react in this situation?

.....
.....
.....

How would you feel? Adjective:[]

Please circle the number. 1-----2-----3-----4-----5

not so frustrated

very frustrated

(2) Situation Two:

You are team-teaching. You find some of your students very disruptive (i.e. talking about unrelated topics in Japanese, reading comic books, throwing things, teasing or bothering other students), but your JTE does not seem to care about such disciplinary problems. The lesson

continues as planned. How would you react in this situation?

(3) Situation Three:

You are at an *enkai* (a formal drinking party). The party is to welcome you as a new teacher. As the party proceeds, everyone relaxes and some of your colleagues come up to you with a bottle of beer in their hand. Filling up your glass, they start to ask you such questions as "What is your impression about Japan? Can you eat raw fish? Are you married? Do you have a boy/girlfriend?"

(4) Situation Four:

You are at your principal's office. He/She makes a grimace. After a long silence, the principal says to you, "You are a teacher. During school or after school you are always a teacher. You must obey the rules." Wondering what the problem is, you say, "Did I do something wrong?" The principal then states rather bluntly, "When in Rome, do as the Romans do."

(5) Situation Five (following the episode above):

Later your JTE explains to you that the principal got a call from one of the inhabitants living in the school district, saying that they saw you walking across the street against the red light and insisting that the principal raise his/her teachers' morals.

(6) Situation Six:

You are planning to take a few days off. Your principal says to you, "It may sound rather nosy, but would you give us some information as to where you are planning to visit? This is because we want to make it sure that we are able to contact you in case some urgent business comes up. We ask Japanese teachers for the same thing."

(7) Situation Seven:

You are team-teaching. You introduce yourself as planned. After you are finished, you are ready to welcome some questions from your students. Then your JTE interrupts you and starts to translate all of your self-introduction in Japanese.

(8) Situation Eight:

Your supervisor at the local board of education calls you, requesting that you work as a judge at a certain speech competition next Sunday. You are having a very busy week, so you feel like relaxing at home next Sunday.

(9) Situation Nine:

Things are going well at five out of six schools that you go to, but you have one school where no one in the office speaks to you. You spend most of your time sitting at your desk, trying to figure out what is wrong.

(10) Situation Ten:

You give a lecture on team teaching to a large audience of JTEs. After the lecture, you say to the audience, "Do you have any questions or comments?" There is no response.

3 Your Experiences?

You might have had the similar experiences as those described above and you must also have had your own experiences of culture shocks and cultural dilemmas in your school(s). Would you please describe them? Would you also let us know how you have overcome some of your problems?

Appendix (2) : Questionnaire administered to JTEs

① 10の場面 (ALT の立場で1、2、3、4、5の数値を)

(1) ALT がクラス全体に質問をしたが、発言がない。そこで、彼 (彼女) は一人の生徒を指名する。その生徒は周りの生徒達と相談しはじめた。()

(2) Team teaching の授業で、数名の生徒が漫画を読む、友達と私語をする、など色々な問題行動を起こした。あなたは、授業後に生徒達と話し合うことにし、その場は注意をせずに授業を進行した。()

(3) ALT を歓迎するための宴会で、同僚の先生達が英語で“What is your impression about Japan?” “Can you eat raw fish?” “Are you married?” “Do you have a boy/girlfriend?”のように個人的な質問をした。()

(4) 校長先生が険しい表情で ALT に「君も先生の立場なのだ。学校から出てきちんとルールは守らなければならない。」と注意を与えた。ALT は何のことかわからず「何か悪いことをしましたか？」と質問するが、校長は、「郷に入りては郷に従えだ」と答えるのみ。()

(5) (場面4の続き) 後にあなたは校長先生から「近所の人からお宅のALTが信号無視をして赤信号で通りを渡っていた。モラルをきちんとして欲しい」という苦情が届いていた事を聞いた。そこで、その内容をALTにあなたは伝えた。()

(6) 休暇をとって旅行に出るといふALTに校長が次のように言った。
「差し出がましいかも知れないが、旅行中の滞在先などを事前に届け出ておいてください。これは何か急用が生じた場合に連絡するためです。日本人の先生達にも届け出をしてもらっています。」
()

(7) Team teaching の授業でALTが自己紹介をした。あなたは、生徒達が理解できるようにと自己紹介を日本語にした。()

(8) 教育事務所の上司から電話があり、来週の日曜日にスピーチコンテストで審査員をしてくれるようにという内容であった。ALTは忙しい1週間を過ごして、週末は少しリラックスしたいと考えていたところだった。()

(9) ALTは6つの学校に出向いている。そのうち5つでは問題はないが、ひとつの学校では誰も話しかけてこない。ALTは机で一人過ごすことが多い。()

(10) ALTが日本人英語教師を対象に Team teaching に関する話をした。話の最後に質問や意見を求めたが、聴衆からは何も意見は出なかった。()

② ALT とのコミュニケーションにおいて、生じた問題や解決策をお書きください。(いくつでも結構です)

③ 異文化理解という観点から教員養成や研修に望む点

(該当項目を○で囲むか数字を記入ください)

○ 先生の年齢： 初任 20代 30代 40代 50代 60代

○ 性別： 女性 男性

○ ALT との過去の経験：何名のALTとこれまでに授業を経験されていますか、人数をお書きください。()名